

どんぐりの子らのうた

岡本文良 作 小澤重行 絵



どんぐりの子らのうた

昭和55年10月 6 日

第 1 刷

著者 岡本文良

発行者 江口克彦

発行所 PHP 研究所

〒601 京都市南区西九条北ノ内町11

電話 075(681)4431 <代表>

東京事務所 03(295)9211

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 和田製本工業株式会社

© 1980 Bunriyoh Okamoto. Printed in Japan.

乱丁・落丁本はご面倒ですが弊所出版部宛お送り下さい。送料弊所負担にてお取り替え致します。

どんぐりの子らのうた

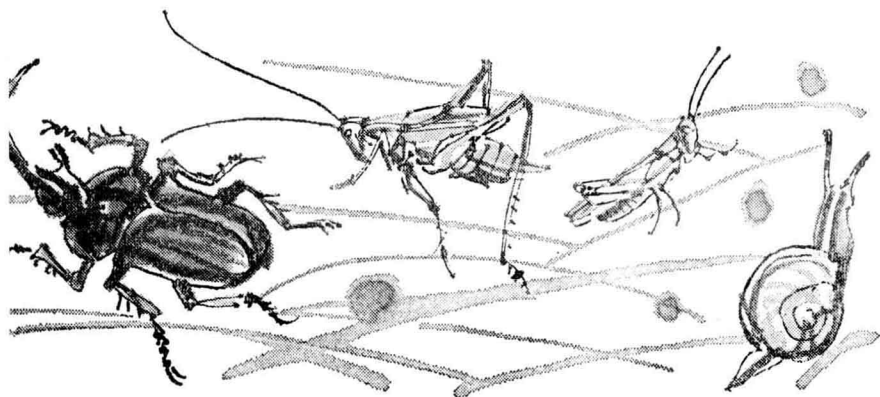
岡本文良 作 小澤重行 絵



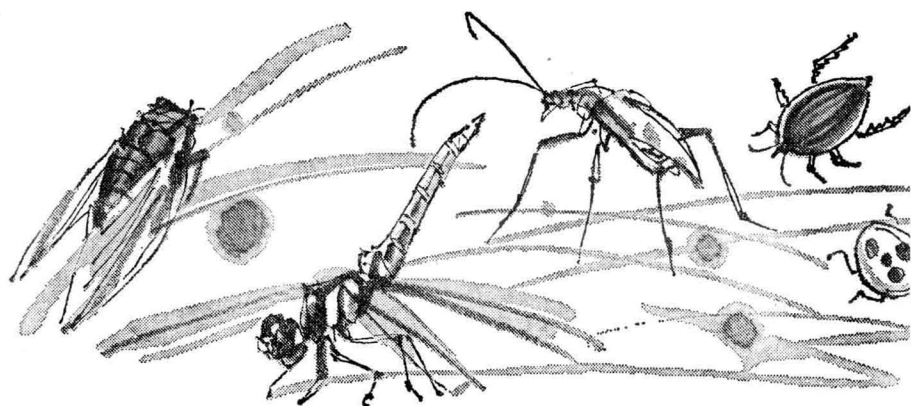
も
く
じ



一	茂の夢……………	8
二	ひとり泣く……………	15
三	あたたかい背中……………	20
四	学園の朝と昼……………	27
五	学園の昼と夜……………	33
六	こんちゅう兄さん……………	39
七	虫の声……………	45
八	カヨ子とお母さん……………	52
九	一つのできごと……………	59
十	古びた家……………	65
十一	月日は矢のように……………	72
十二	かつてな親たち……………	78
十三	子はだれのもの……………	85



十四	秋風はさそう……	93
十五	すねた心……	100
十六	反省……	107
十七	長い夜の道……	115
十八	月に向かってとぶ……	120
十九	ころんだ子……	127
二十	流れる雲……	135
二十一	父と子、それに母と子……	144
二十二	新年……	151
二十三	春近い日……	159
二十四	別れるとき……	166
	あとがき……	173



著者・岡本文良（おかもと・ぶんりょう）

1930年生まれ。茨城県出身。東京大学文学部卒業。出版社勤務ののち、文筆業にはいる。著書に『みちのくの聖僧』（ポプラ社）『シャカと天女と神の国』（あかね書房）『冠島のオオミズナギドリ』（小峰書店）『なるほどねイソップさん』（PHP研究所）などがある。現住所 〒132 江戸川区船堀 1 の 1 の 26 の 228

画家・小澤重行（おざわ・しげゆき）

1928年横浜生まれ。山下品藏画伯に師事。現代水墨画会常任幹事を経て現在無所属。個展グループ展などの創作活動が多く、スイス展イタリア展などに出品。また、文芸雑誌、新聞小説などのさし絵の仕事も多く手がけている。現住所 〒144 大田区仲六郷 4 の 8 の 14

どんぐりの子らのうた



茂^{しげる}の夢^{ゆめ}

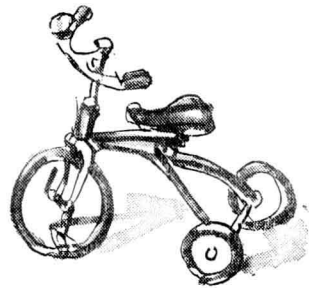
雨のふる晩^{ばん}のことです。茂^{しげる}は、夢の中のこわい世界^{せかい}を歩^{ある}いていました。

梅雨^{つゆ}どきのため、雨はもう何日となくふりつづいていました。強くなったり弱くなったりしながら、昼も夜もふっていました。

弱いとき、雨は、しとしとと地上にふりそそぎます。しかし強くなると、ざあざあという、はげしい音にかわって大地をたたきます。

夢の中で、茂^{しげる}には、ざあざあいうはげしい雨の音が、さわがしく道路^{どうろ}を走っていく車の波の音のようにひびいていました。

茂^{しげる}は、車の波の中をおよぐようにして歩いていました。車は、びゅんびゅんと、まるで茂^{しげる}の



からだをさらうように走りすぎます。

「いやだなあ。こわいなあ。」

茂は、そう思いました。おそろしくて、足がすくみそうです。気も狂いそうです。それでも、仕方なさそうに歩いていきました。

「ほら、早くぶつかるんだよ。」

うしろの方から、きんきんとがったような声が聞こえました。それは、茂にとって、車い上におそろしい声でした。茂は、その声にあやつられるように、つぎつぎにおしよせてくる車の波の中を歩いていきました。

また矢のように、車が走ってきました。茂は目をつむると、ふとよろけるように、からだをその車にぶつけていきました。

キ、キ、キ、キイーツ——！

車は急ブレーキをかけると、タイヤをきしませながらすべっていきました。そのとたん、茂も道路にたたきつけられて悲鳴をあげました。

「きゃあーっ！」

茂は、その自分の悲鳴で、こわい夢の世界から引きもどされました。同時にびよこんと、ばねじかけのようからだをおこします。びっしりと寝汗をかいていました。

さあさあいう雨の音が耳にはいり、十二畳の部屋を照らしている赤い小さな電球が目につりました。その下で、小学校四年生から中学三年生まで、七人の男の子がふとんを並べて眠っています。

「そうか、ぼくはここにいたのか？」

茂は、ぼんやりそう思いました。

茂の悲鳴を聞いて、幸次も目をさましていました。幸次は中学三年生で、この部屋の部屋長をしています。

「茂、どうしたんだ？」

幸次がふとんを出て、やってきました。

茂は、悲しそうな目で幸次の顔を見あげました。まだ夢の中にいるような気がして、なにもしうことができません。すると幸次が、茂を寝かせてふとんをかけてくれました。

「茂はまだ学園にきたばかりだから。はじめのうちは、だれでもさびしいんだよ。でも、がまんしろ、な。」



幸次はそういったあと、自分のふとんに帰って寝ました。

茂もふたたび眠りにつきました。するとまた、同じ夢の世界に引きこまれてしまいました。

雨がまたいちだんと強くなったため、茂の夢の中の車の波もふえていました。茂は、それに向かつて、ふらふらと歩いていきます。

「ほら、茂、早くぶつかるんだよ。」

おこつて、けしかけるような声も、また聞こえてきます。

しかしそれと重なって、こんどは別の声も茂の耳の底にひびいていました。

「茂、いいか。そんなことはしなくてもいいんだぞ。そんなことはしなくてもいいんだぞ。」

その声は、茂に向かつてそういつづけていました。茂には、それが自分の心の底の声のようには思えました。

茂は、けしかける声と自分の心の底の声ともまれるようにして歩いていきました。車のこわさを思い出すと、からだかひとりでにけしかける声にさからって動いていきます。

「そうだ。ぼくは、なにもこんなことをしなくてもいいんだ。こんなこわいことをさせるお母さんのところなんか、逃げ出してしまえばいいんだ。」

茂は、夢の中ではと目がさめたようにそう思いました。

じっさいに、茂はふとんの中で目をさましてからだをおこしていました。しかしその心は、まだ眠ったままの夢の世界にいます。夢と現実の区別がつかない、夢遊病のような状態にありました。やねを打つ雨の音も、まだそのまま車の流れる音に聞こえています。

「そうだ、こんなこわいところは、逃げてしまおう。」

茂はむっくりおきあがると、まるで魔法にあやつられるように、庭に面したガラス戸のところにいきました。カーテンを押しのけると、かぎをあけてガラス戸を開きます。ざあっと、はげしく雨が吹きこみました。

その音で、部屋長の幸次がふたたび目をさしました。

幸次は、外に出ていく茂のうしろ姿を見ました。茂が白いパジャマを着ていたのです、それは、すうっと音もなく、暗やみの中に吸いこまれていく幽霊のように思えました。幸次は、おそろしくて、思わず背すがこおりつきました。

しかしやがてはっと気がつくと、部屋をとび出して、廊下の向かい側にある保母さんの部屋の戸をはげしくたたきました。

「たっ、たいへんだっ。茂^{しげる}が出て行ってしまったんだ。どこかへ行ってしまったんだ。」

おどろいた保母さんがおきてきて、別の部屋にとんでいきました。そこには、指導員^{しどういん}の大川^{おおかわ}さんが泊^とまっていました。大川さんもおどろいて、棟^{むね}つづきになっている園長^{えんちやう}さんの家にとんでいきました。

園長^{えんちやう}さんは、法名^{ほうみょう}を照石^{しょうせき}というお坊^{ぼう}さんです。六十歳^{さい}ほどの年齢^{ねんれい}で、絵で見る仏^{ほとけ}さまのような丸い顔につねにやさしいほほえみをたたえた人です。

園長^{えんちやう}さんは、大川^{おおかわ}さんや幸次^{こうじ}の話を聞くと、その顔にさつと悲^{かな}しみの色を流して身じたくをはじめました。

「どこへいったのだろう？　すぐ、さがしにいこう。」

「園長先生、ぼくもいく。」

幸次^{こうじ}がいました。

雨^{あめ}は、いぜんはげしくふっていました。

ひとり泣く

門を出ると、学園の敷地にそって一本の道がのびています。

両側に、何百年もたった古い杉の太木が並んでいました。街灯が、高いところから、その太い幹を照らしています。街灯の光の中には、はげしい雨足がまるでたきのような感じで落ちていました。茂は、その下を、ふわりふわりと歩いていきました。

道が、途中から、右に曲がって石段になっていました。茂はそれに気づかず足をすべらすと、はずみをくらってごろんごろんと下まで落ちていきました。全身を強く打って、車にひかれたとき骨折した足に、ものすごい痛みが走りしました。

その痛みが、茂をわれに返らせました。

